

## 戦火と便り

どおん、どおんと大砲の音が夜の闇と地を揺らす。そこかしこで炎が立ち昇り、黒煙が空気を淀ませる。陸軍少尉第七部隊隊長・一条 凜桜<sup>いちじょう りお</sup>は塹壕の端で顔を顰めた。その整った横顔は砂埃に汚れ、黒髪<sup>くろかみ</sup>の貼り付いたこめかみに大粒の汗が伝う。

戦況は最悪だ。

敵の不意を突くため幹部が立案した夜襲攻撃作戦は失敗に終わった。あたかもこちらの手の内を見透かしていたかのように、敵軍の集中砲火が続く。塹壕の中は度重なる砲撃に揺れに揺れた。砂壁が崩れ、振動に隊員達は皆よろめき倒れそうになる。

「一旦皆頭を下げろ！」

轟音の中凜桜は声を張り上げた。

この場は一旦引き下がらねばなるまい。先程から無線で上官に退却の指示を請うているものの、返事は「持ち堪えろ」の一点張りでどうにも埒が明かない。敵の大砲の音がより一層大きく聞こえ始め、塹壕の中がまた激しく揺れる。後方の陣営から別部隊に撃たせていた大砲はとうの昔に切れてしまった。このままでは大切な部隊をみすみす業火の中に失ってしまうかもしれない。隊員の中には凜桜が軍学校で見知った顔も多い。その内の何名かは既に息をしていないようだ

った。この惨状が、ただでさえ酸素の薄い戦場で凜桜の呼吸を一層浅くした。  
今一度退却の指示を請うため、無線機に震える手を掛けたその時だった。

「危ない！」

部隊の一人が叫ぶ。見ると凜桜の幼馴染で古くからの友人である橋本が、一人塹壕を飛び出し敵陣へ駆けていく。

「橋本！何やってる！」

体が勝手に動いた。思わず塹壕の壁を飛び越え凜桜は友を追う。

「いけません少尉！」

「危険です！」

後ろで口々に隊員達が何か言っているが、もはや耳に入らない。気がつくとき  
れだけ撃たれていた大砲の音は止み、敵軍の騎馬隊と歩兵隊が数百メートル  
先を進軍してくる。先の世界大戦の影響で大砲の数を揃えられなかったのは、  
どうやら祖国だけではなかったらしい。ここから先は人間同士の一騎打ちとなる  
だろう。敵軍の先頭から数十メートル離れた位置を一人の馬に乗った軍人が先

陣切って向かってくる。橋本は軍服の腰に下げていた刀を抜き、その人物へ一直線に駆けていく。

「天神帝国の仇め！」

離れた位置からはよく聞こえなかったが、そう叫んだようだった。

「待て！橋本！」

必死に叫び追いかけるも、いよいよ馬上の人物の元へ橋本が辿り着く。彼の振り上げた刃が闇夜の中にもきらりと鋭い光を放ったそのときだった。敵軍の後方から飛んだ矢が橋本の首に命中し、ど、と聞いたことの無い音を立てた。

凜桜は瞬時呼吸を忘れた。

つい今まで躍動に満ち満ちていた目の前の肉体が、力なく地に頽れる。その様子はまるで活動写真の中の出来事のように空虚で現実味が無い。凜桜の足は止まっていた。馬上の人物は何事も無かったかのようにそれまでの速度で凜桜の目の前へとやってくる。闇夜の中、顔はよく見えない。軍服の上に纏ったマントがひらりと風に大きく靡いた。

凜桜の頭の中は真っ白だった。風の温度もわからぬ程に体の感覚が失われていく。

橋本が、死んだ。

その言葉だけがすっと凜桜の胸に降りてきた瞬間、凜桜の中で何かが弾けた。目にも留<sup>と</sup>まらぬ速さで抜刀し目の前の男に振りかぶる。馬上の相手の方が有利だとか、また矢が降り注ぐように飛んできているだとか、そんなことは眼中に無い。男は剣で凜桜の打撃を弾き返す。先陣を切るだけあってなかなかの手練れであることがその所作から見てとれた。

「あ……っ」

予想を遥かに上回る力に圧され、思わず足元の段差に躓く。仰のいた凜桜の眼前に黒い空が流れ、後頭部に衝撃が走る。

「っう……」

固い地に頭を強かに打ち付け、激痛に思わず声を上げた。その呻きが、自分のものである筈なのに遠くに聞こえるのは何故だろう。それに周囲を取り巻く喧騒も。視界が水面のように揺れ、天も地もわからない。

「少尉！」

「一条少尉！」

口々に名前を呼ばれるが、その声たちも遠くに聞こえ、次第にどんどん小さくなる。暗くなる視界の中、僅かな月明かりに照らされた馬上の人物の顔を初めて捉える。西洋人らしくはっきりと高低の付いた顔立ちに、吸い込まれそうに美しい瞳と特徴的な泣きぼくろ。すっと真っすぐな鼻筋に、程よく厚めの唇。月の光を受けて戦場に立つその姿は雄々しくも神々しく、どこか人間離れした空気をも纏っている。その情景を最後に、凜桜の意識はふつりと途切れてしまった。

世界歴三万七千年。国内歴<sup>じんけい</sup>神桂二十八年。

もう何度目になるのかもわからない世界大戦が漸く終息を迎え、各国が傷ついた土地や衰退した経済を回復しようとしている折であった。

「凜桜様、郵便が来ております」

いつものように国営の軍学校から帰宅すると、女中が怪訝そうな顔つきで茶封筒を差し出してくる。

「ありがとう」

女中の表情を不思議に思いながらも凜桜はそう言って封筒を受け取った。袴の上に白い洋物のエプロンを身に着けた女中は一礼し、元来た古びた家屋の廊下を静々と去っていく。凜桜に何か聞きたげな表情を浮かべたまま。それでも

何も言わないのは、身分柄差し出がましい真似はするまいという彼女の自制心の現れなのだろうか。

自分宛ての郵便物自体が普段からあまり来ないということもあるし、単に彼女にとって珍しいというだけのことかもしれないが。

しかし、凜桜は封筒の表書きを見て納得した。

いちじょう  
『一条 凜桜殿』

てんじん  
天神帝国 陸軍 総司令部より』

厳めしい字面に女中が首を傾げるのも頷ける。世界大戦も収束した折に祖国の軍から凜桜個人宛てに、一体何の用であろうか——。凜桜の十七の男子にしては大人びた横顔が封筒の表をじっと見つめる。父親譲りのすっきりと端正な顔立ちの中に、母親譲りの優美さが宿る。射干玉のように黒い髪と瞳。男にしては大きめの瞳が白い肌によく映える。顔立ちのせいなのか、鍛えていても細身な体つきのせいなのか、凜桜の容姿は見る者にどこか中性的な色香を感じさせた。

刀剣の鍛錬で豆のできた手で封を切る。思えば、この封筒こそが全ての始まりだった。

## 囚われた花

封筒の中身は徴兵令状だった。

「お前を戦の火の元にやるなど本当はしたくないのだが……」

座卓の真向かいに座す父はそう言って溜息を吐く。畳の間には暖かな春の光が差し込み、縁側まで開け放った障子の外には美しい緑が広がっている。元は武家で名を馳せた一条家の広大な敷地には、池や松が風情豊かに配され、本邸の後ろには使用人達の住居が連なり建つ。

『武士の家の名に恥じぬよう、御国の為とあらばこの身をいつでも差し出すように』とは、いつもの父上のお言葉ではありませんか」

凜桜は正座の上の背すじをより一層ぴんと正し、そう応えた。

「それはそうだが……、やはりな、お前にはこの家を継ぐという役目がある。早々に戦に出向きその身を危険に晒すのは、いかがなものか……」

父はまさかこの家の者にまで徴兵令が下るなどと夢にも思わず、事前の根回しを怠ったことを酷く後悔している様子だった。

複数の国と同盟を組み世界大戦に勝利した天神帝国。戦後の講和条約では敗戦国より多額の賠償金と西海の孤島ユンヴァの土地を受け取る手筈となり、これまで投じてきた人員や費用が報われるかに見えた。

これまでの経緯を、職業柄政界に繋がりのある父は淡々と話す。そこまでは凜桜も知っていた。念願であった土地を入手した事実は新聞各社にも大きく報じられ、国中が沸き立っていたからだ。ユンヴァは古来から天神帝国の神々が棲まう神聖な島であるという伝承もあり、ユンヴァ奪還は国全体の悲願であった。

しかし父が言うには、ここに来て重大事件が起きたらしいのだ。まだ公にはされていないが、古から天神帝国と敵対してきたヴェルディアン皇国が、天神帝国の領土となった筈のユンヴァで自国の港の建設に着工したのだ。あまりにも突飛な出来事で、とにもかくにもヴェルディアンに交渉を試みるも決裂。かくして天神帝国の総裁である帝は聖なる神々の島を取り戻すべく、西大陸内陸の地ヴェルディアンへの進軍を決定したのだった。

「進軍の決定は昨日私も耳にしたが、しかしまさか……。この家からも徴兵をするなど……。我が国は先の大戦で余程人員を失ったと見える……」

狼狽した様子で父は項垂れたようにそう続けた。

「しかし、父上。これは今まで軍学校で学んできたことを活かせる良い機会では



ありませんか？私は今まで軍学を専門に学ぶ身でありながら、戦場に出たことはただの一度もありません。これはきっとお上……私たちの尊い帝が与えて下さった好機なのではないでしょうか？御国の為に尽くす良い機会です」

凜桜は父を励ますようにそう言った。

しかし父の顔は晴れなかった。

「凜桜。お前を少し真面目に育て過ぎたようだな。……お前なら本心からそう言うのではと薄々思っていたが……」

「……？僭越ながら、どういう意味でしょう？私は帝のお役に立てるのであれば、これ以上嬉しいことはありませんが……」

「……いや、いい。徴兵令状が来たからには、どの道こちらに拒否権は無い。…こようになったからには仕方がない。昔の馴染みに陸軍長官と親しい者がいる。私から掛け合って、兵役には服しても前線には送らないよう手筈を整えよう」

「父上、一度決めたからにはそのような配慮は……」

「凜桜」

思い詰めたような表情で名を呼ばれ、凜桜は口を噤んだ。

「何も私は、家督を継がせたいからという理由だけでお前を失いたくないのではないよ」

「父上……」

「お前は少し真面目が過ぎる。大事な一人息子を戦にやりたくないのはどこの親も同じだ。軍学校だって、この身分であれば教養として通うだけのことだ。それだけで良いんだ……。私は本当は……」

「……必ず、勝利をこの国に持ち帰ります」

これ以上父の弱っているところを見たくはない。父の言葉を遮るように言い残すと、凜桜は深く一礼し退室した。家長でもある父に対して失礼は重々承知だったが、どうにもいたたまれない気分が凜桜に重くのしかかり、もう父の顔をまともに見れなかった。あれは、いつも質実剛健を旨とし、自他ともに厳しく一条家を取り仕切ってきた凜桜の父の姿ではない。立派な武人となり、先祖とこの国に恥じない存在であれといつも凜桜に説いてきた、あの父ではないのだ。

自室へ帰る途中、帝の肖像画のある部屋の前を通りかかる。

「……私は御国のために今まで努力して参りました。貴方の思し召しとあらば、私はどこへでも参りましょう……」

額の中には煌びやかな軍服を身に纏った初老の男がこちらを向いて微笑んでいる。

これまで培った学問も剣術も、全てはこの国——つまりはこの男のためにある。帝の崇高なご意思こそが国の意思であり、自分はそのために全てを捧げる存在でなければならない。そう家でも学校でも教わってきたし、そうなることは凜桜自身の望みでもある。学習や鍛錬は時に困難を生むが、そうした神聖なもののための努力だと思ふことが、いつも凜桜に充足感を与えてきた。そのお陰か学業も武術も今や天神帝国で上から指折り数える程の凜桜である。今更この思想を覆すことは、凜桜にとって自らの体の大部分をそぎ落とす行為に等しかった。

「何があろうとも、貴方は私の神です」

肖像画にそう語りかける。

自分が自分であるために、凜桜は徴兵に応じることを自らの意思で選んだのだった。父親の根回しも空しく、凜桜はその優秀さから前線部隊の隊長に任じられた。

出立の日に凜桜を母と見送る父の顔は、またいつもの厳めしい風貌に戻って

いた。

「御国に恥じないよう、よく勤めなさい」

そう短く言った父に、凜桜は内心安堵した。

「行ってまいります」

凜桜は誇りを胸に汽車へ乗り込む。

右手には父から譲り受けた一条家の刀。黒い漆で塗られた鞘が陽光を艶やかに反射する。

「きっと、御国に勝利を持ち帰ります」

誰にともなくそう呟くと、列車は春の陽射しの中に動き出す。四月の風が桜を散らし、どこかで鶯が鳴いている。

僅かな光に目を覚ますと、闇の中に見慣れない石壁が薄ぼんやりと浮かんで見える。戦闘の最中口に入ったらしい砂がじやり、と不快な歯触りを生んだ。辺りの様子を窺うため横たえていた身を起こそうとして、何やら違和感に気が付く。じやらりと重い金属が触れ合う音に目を向ければ、両足首と両手首に嵌められ

た枷が見える。銀の鎖が僅かに差す月の光を反射した。

「俺は……、ここは一体……、」

気づけばどこからともなく這い寄る冷気。体が冷えるのと共にじわじわと言い得ぬ不安がにじり寄る。

自分は確かヴェルディアンへの遠征で、隊を率いて前線に居たはずだ。そして、劣勢の挙句――。

「起きたか」

知らない声にはっとして凜桜は<sup>おもて</sup>面を上げた。

古びた鉄格子の扉がぎい、と音を立てて開かれる。入室してきた人物を一目見て凜桜は驚愕した。

「お前は……」

言いかけるとその人物は特徴的な泣きぼくろのある目を細め、薄く笑みを向けてこう言った。

「ヴェルディアン皇国第一皇子、ブラッド・フォン・ヴェルディアンだ。ここはヴェ

ルディアン城の地下」

間違いなく戦場で最後に目にした男だった。そう認識すると同時に、この男に会うまでに起こった出来事を改めて凜桜は思い出す。

あの位置に矢が刺さったのではとても生きてはいられまい——。

凜桜は橋本のことを思い胸を酷く痛めた。

「お前の名は何と言うんだ？」

狭い牢の中筋肉質な体を屈め、男はこちらへ近づいてくる。厚い胸板は逞しい曲線を描き、そこに並ぶ数多の勲章をより一層誇らしげに見せた。

「えっと……」

顔を見た衝撃で男の一言目をあまりしっかり聞いていなかったが、確か先程この男は自らを『皇子』と言っただろうか。——言った。確かに言った。

「お前、皇子だったのか……？」

今更のように追い付いてくる思考に混乱し、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。自分としたことが、状況の異様さに完全に冷静さを欠いている。

「あっははは。そう言ってるじゃあないか。見た目に似合わず案外面白いな、お前は」

芸術品のように整った顔立ちを思い切り崩して男は笑うと、遠慮なく凜桜の隣へ腰かける。

まさかこの男が、ヴェルディアンの子だったとは。皇子が自ら軍の先頭に立っているなどとは思っても寄らなかった。しかし、言われてみればこの気高い風貌は皇子と呼ぶに相応しいものを感じる。

それに凜桜はもう一点驚くべきことに気がつく。先程から皇子は凜桜の祖国の言葉を喋っているのだ。凜桜も学業の上で一通り外国語には触れているが、所詮は机上だけの学習の域を出ず、実際に日常で使うことなど皆無だ。祖国では敵国の物を悉く排除する習わしもあるし、ましてや敵国の言語をこんなにも淀みなく口にする機会があるなど、天神帝国の人間には信じがたいことである。その上古来より島国であった天神帝国の言語は文法や表現が独特で、海外の者にとっては習得が困難と聞く。その言語をここまで流暢に話せるとは驚きである。

「で？名前は何て言うの？」

先程笑った余韻が残っているせいなのだろうか。随分と砕けた口調で男は再度凜桜に問う。

「わ、私は……」

言いかけて凜桜ははっと己の状況を思い返す。しばし言葉を切って思考を巡らせた。さまざまなことが一度に起こり過ぎていて、凜桜は頭を整理するのに数秒を要した。疑問を整理し、その中で最も大きなものを口にする。

「皇子、私はヴェルディアンVerdianの捕虜となったのか？」

皇子の問いに答えるより先に、自分の今置かれた状況をまずは知りたい。

「……ああ。そうなるな」

皇子はあっさりと答えた。

状況から見てそうではないかと踏んでいたが、やはり正解だったようだ。冷たい汗が凜桜の喉を伝う。

「……私の刀はどこにある？」

身に着けていた弓矢や刀、無線機等、あらゆるものが見当たらない。その中でも刀は一条家の歴史が刻まれた大切な家宝だ。



「こちらで預かっているよ」

「……返してはもらえないだろうか……？」

「うーん、それは無理。そういう決まりなんで」

わかってはいたがやはり捕虜の者にそう簡単に武器を返すわけにはいかないようだ。そんな答えのわかり切った質問を投げかけたのは、次なる最後の問いを先送りにするための時間稼ぎだったと凜桜自身わかっている。

「私と共にいた仲間はどこに居る……？」

本当はこれをいちばん始めに聞きたかった。答えを聞くのが恐ろしくて、本当は口に出すのも辛い。呼吸が浅くなり、背に伝う汗は酷く冷たい。

「ああ、あの場に居た隊員達か。彼らなら……」

凜桜はごくりと唾を飲み込んだ。

「彼らなら、別棟で治療を受けているよ。塹壕に居た人達は皆軽傷だったし、治療が終わり次第別室で休養させる」

皇子の返答に凜桜は少しだけ胸をなで下ろした。橋本やその他爆撃に撃たれた者のことを思うと胸が痛い。全ては隊長である自分の責任だ。しかし生き残った者もいると聞き、凜桜は純粹に嬉しかった。部下を死なせてしまった自分の罪が軽くなるわけでないことは勿論わかっている。しかし、仲間が生きているというのは単純に嬉しいものだ。

「そうか……。人数はわかるか？」

「十七人だ」

十七。その数は凜桜が塹壕を飛び出す直前、最後に確認した生存者の数だった。あれから橋本を除いて誰も死んでいない。その事実が凜桜をまた一つ安堵させた。

「そうか……。そうだったか……」

凜桜は何度も頷きながら喜びを噛み締めた。

ヴェルディアン皇国の人間は捕虜にした者に対し人間以下の扱いをし、あらゆる拷問や刑に処して残虐の限りを尽くすと凜桜は聞いていた。軍学校の教官が厳めしい顔をして語っていたのを今でも覚えているが、実際には違っていたようだ。

「仲間が無事で何よりだ……」

凜桜は心の底から呟いた。

「皇子、私の部下を親切に計らってくれたことに感謝する。そして……」

凜桜はその大きな瞳で真っ直ぐに皇子の目を見つめた。

暗い中でもわかるほど透き通った翠の目に、自虐的に笑いかける。

「私の名前は一条凜桜。第七部隊隊長の一条は死んだと皆に伝えてくれ」

そう言うと凜桜は自らの舌を逡巡もなく噛んだ。

「！おい……！」

ブラッドが焦ったようにベッドから腰を浮かせる。

「やめろ……！」

ブラッドの大きく武骨な手が凜桜の細い頤を掴む。

ここには刀も脇差も無い。敵に奪われてしまった。それならばもうこうする他な

いのだと、凜桜は自らの薄い舌をこれでもかという力で噛み込む。噛まれた舌が痛みを乗り越えて無感覚になり始めたが、いざやってみるとなかなか死ねないものである。もう自分の舌から多少なりとも血は流れただろうか。

「おい……！おい……！」

気づくときゅっと目を瞑ったまま凜桜は舌を噛んでいて、皇子が耳元で何事か叫んでいる。口を開けさせようと太い指が唇に触れる。

——触るな。敵の分際で、私に触るな。

凜桜は心の中で叫んだ。

この気持ちはきっとお前にはわからない。祖国の役に立つ人間であろうと、尊い帝の御名に恥じぬ国民であろうと、ただそれだけのためにこれまで生きてきた。それなのに。この醜態は何だ。部下を死なせた挙句戦果も上げられず、気を失っている間に易々と捕虜の身に甘んじているなんて。

「やめろって！」

皇子は懲りずに自害を阻止してくる。しまいには歯を無理矢理にでもこじ開けようと凜桜に覆い被さってくるのだ。寝台の上で二つの影が纏れ合う。凜桜だって十分に鍛えた体を持っているのだが、細身であるし、皇子の体のほうが随分と大きい。力では到底敵わないだろう。凜桜が屈するのも時間の問題である。

そうなる前に、早く。運命よ、早く俺を殺してくれ——。

凜桜は胸中でそう叫ぶ。舌の感覚はとうの昔に無くなっているが、それでも苦しさは残る。この苦しみから早く解放されたい。いや、この死に際の苦しさこそが、もしかしたら自分の罪に対する正当な罰なのかもしれない。凜桜は皇子の腕に抗いながらそう思う。

仲間を死なせた。

祖国の名誉を傷つけた。

自分を責めても責めても責めきれない。

「いい加減にしろ！」

尚も自害をやめさせようとしてくる皇子の声を、凜桜はいつしか苛立ちの中に聞いていた。元はと言えばこの皇子の国がユンヴァを奪ったりしなければ、このような戦争はしなくて済んだ話だ。目の前の男は『敵』なのだ。それなのに、この期に及んでこちらの死を阻止してくるなんて。

一度手元に置いた捕虜になんの手順も踏まず勝手に死なれるのは、やはり業務上困るのだろうと、どこか冷えた頭の片隅で凜桜は思考した。それにしたって腹が煮えくり返りそうだ。自分自身の次に、この男が、敵国の皇子が今は憎い。緊張と疲労と自責の念と、さまざまな感情とで擦り切れた凜桜の神経が、彼自身にいつになく過激な思考を強要した。

もういい。目の前の敵を困らせて、自らと祖国の誇りをこれ以上失わないため

に、私はここで死ぬ——！

もう一度己に誓って舌を噛み締めたときだった。

押さえつけられていた体が不意に解放され、代わりにふわりと唇に何か柔らかいものが当たる感覚に目を見開く。

「……っ！」

凜桜は眼前の光景が信じられず思わず舌から歯を浮かせた。感覚を取り戻した舌がじいんと熱持ち、歯型を中心に津波のような痛みが襲う。しかし、それどころではない。敵国の皇子の秀麗な顔がすぐ傍にある。伏せられた瞳の上に被さる金の睫毛が美しい。重ねられた唇から彼の熱がじんわりと伝わってきた。

なんだ？

なんなんだこの状況は？

頭が真っ白になりかけたところで唇を離される。凜桜は先程までの激情も忘れ、啞然と目の前の男を見やった。

「落ち着いた？」

堀の深い端正な顔立ちに似合わず柔らかく笑う男。程よく厚い唇が緩やかに弧を描く。その表情はどこか悪戯を仕掛けた子どものように楽し気で、最初の印象とは随分とかけ離れている。何か言葉を発そうとするのだが混乱した頭では

何も出てこず、結果凜桜は口をはくはくさせながら酸素の足りない水槽の魚のようになる他なかった。

「良かった。切れてないみたいだな」

力の抜けた凜桜の口元を手で軽く広げるとブラッドは医者のようにその舌を取り出してそう言った。

「凜桜。お前は綺麗だからあまり手荒なことはしたくないのだが」

そう言ってブラッドは自らの上衣の裾を裂くとその細長い切れを凜桜に噛ませ、後頭部できつく結んだ。舌を噛めないようにしたらしい。

「また舌を噛まれてもいけないからな。許してくれ」

混乱のあまり抗議する気力も無くて、凜桜は半ば呆然と皇子のなすがままになっている。

「ああ、それから」

皇子は重ねてすまなそうな顔をした。

「形式上部下がこんな場所を用意してしまって申し訳ない。すぐにお前の部屋を用意させる」

皇子の言葉はどれも凜桜の思考の網の目をすり抜け流れ去っていく。

この後、皇子の侍従達に手足の鎖を外され清潔な夜衣に着替えさせられた後、先程とは似ても似つかぬ豪華な部屋に通されて柔らかな寝台に凜桜は横になった。が、凜桜はこの一連の流れを全く覚えていない。先の予想外の出来事が衝撃的すぎて、あるいはさまざまな事象が同時発生したせいで、凜桜の頭と心の容量は完全に許容できる分量からはち切れていた。



## 皇子の罾

ここはどこだろう——。西洋の貴族が住まう部屋そのものといった趣の部屋で凜桜は目を覚ました。見上げる深い色の天蓋の端には金の刺繍が施され、大きな窓から降り注ぐ朝の光をきらきらと反射する。

寝台の上で身を起こすも全身が怠い。

確か、昨日は——。

悪夢のような記憶を辿る。仲間を死なせ捕虜の身となった自分は自害しようとして、けれど皇子に止められて——。それから皇子のあの『意味不明な行動』を思い起こし、今更のようにかつと首から上に血が集まるのを凜桜は感じた。

なんなのだあの男は——。

あの男のしたことを考えると言いようのない羞恥と憤怒が沸き上がり、凜桜の胸を焼いた。仲間の死や捕虜となった隊員達のことなど、考えることは山ほどある。しかし今の凜桜にはあの男の言動が不可解に思えてならず、思考がどうやってもあの男に向いてしまう。まるで呪いのように。

造り物のように整った顔が視界いっぱい広がる光景を思い出しては動揺で胸が苦しくなり、忌々しいことに感情の整理すらつかなくなる。

あの男、一体どういうつもりで——。

もう一度思考を巡らせようとしたそのときだった。

「凜桜」

聞き覚えのある声に凜桜ははっと顔を上げる。

茶色の焼き菓子のようなドアを開けて入ってきたのは、侍従を連れたブラッド皇子だった。軍服を身に纏い、肩には皇族の証であるマントを身に付けている。改めて明るい場所で見るとその容姿が例えようもなく美しいことがよくわかる。緩くカーブを描く金の髪は黄よりは白に近い。透き通った瞳は清水に沈めた翡翠のよう。右の泣きぼくろも相俟ってか、見る者を惑わせる色香を放っている。昨日の今日でこの男を前にした自分の心臓は、未だ整理のつかぬ数多の感情と緊張とで張り裂けそうな程である。しかしそれとは裏腹にこの透明な翠の目を見ていると気が安らぐような心持ちもするから、非常に奇妙である。

皇子は近づいてくると当然のように凜桜の寝台の端に腰掛ける。急に近くまで来られて、凜桜は思わず寝台の上で後ずさる。凜桜の祖国では例え親しい者同士であっても、普通はある程度の距離を他人と置くのが常である。だからこうして他人に距離を詰められると、正直どうにも違和感が拭えない。

「少し落ち着いた？ 食事を持ってきたから、少しでも口にするといい」

まるで古くからの友人であるかのように砕けた態度で皇子は話しかけてくる。侍従が膳の載った銀の盆を寝台脇のテーブルに置いた。その存在すらも忘れていた口元の布切れを取り払われても、とても食事に手をつける気分にはなれなかった。

「……食べたくない」

「食べないと痩せてしまうぞ。せっかくの綺麗な顔がやつれたら大変だ」

綺麗な顔。一体どの顔でそんなことを言うのだろう。それはお前のほうだろうと内心思ったが、言い返す余裕は今の凜桜には無い。当の皇子は社交辞令でも何でもなく、本当に凜桜のことを美しいと思っているらしい。先程から感心したように顔を見られて落ち着かない。こんなにじろじろ見られては通常なら値踏みされているような気分になり憤慨するところだが、この男の宝玉のような目に見つめられるとそのような気分にはならないから不思議だ。そこまで考えて、いや、と凜桜は心の内でかぶりを振る。目の前の男は他ならぬ『敵』なのだ。天神帝国軍を滅ぼさんと進軍する様を、この目で自らも見たではないかと。憎き敵が目の前に居るのだと思い直せば、再び腹の底が煮える気がした。

「もう命を絶つような真似はやめてくれよ」

凜桜の瞳の奥に揺れる暗い色を読み取ったのだろうか。皇子が諫める。

「……お前には関係の無いことだ」

凜桜は素っ気なくそう返した。自分の命をどう扱おうと、敵のお前にとやかく言

われる筋合いは無い。そう思ったのだ。

「たしかに、そうだな」

ブラッド皇子は意外にも簡単に頷いて見せた。

「けど、いいのか？死んだら別室の部下にもう会えなくなるぞ」

「……いい。いずれにしろもう彼らに合わせる顔など無い。私は隊長として『失敗』した」

「……そうなのか？もし部下の死に責任を感じているのなら、そこまで凜桜が気に病むことは無い。戦争とはこういうものだからな。それに……」

皇子の低く艶のある声音は優しく落ち着いた響きを孕んでいる。

「それに、生きてさえいれば俺を殺せるチャンスがある」

「……え？」

今、この男は何と言ったのだろうか。先程からと変わらぬ落ち着いた声音の中

に、今何か不穏な言葉が聞こえた気がする。

「考えてもみろ。こんだけ一生懸命勉強して訓練して戦場にも来たんだらう？ 凜桜が生真面目で努力家なのは昨日初めて会った俺でもわかる。せっかく人一倍頑張った行きつく先が自害するのは、いくらなんでも無いんじゃないか？」

「……そ、それは……」

「凜桜、お前は結構頑固だらう？」

にやりと見透かしたように皇子は笑んだ。

「頑固一徹。決めたら絶対やり遂げるタイプ。だからこそ凜桜はその若さでこんな内陸の地まで兵を連れて来られる程の地位にもつけたんだらう。そのお前が、だ。ここまで来て今更何の戦果も挙げないつもりになっているのがなんだか可笑しいな。捕虜がなんだ？ 目の前に敵は居るんだ。またとない機会じゃないか。国に皇子の首を持っては帰りたくないのか？」

急展開の過ぎる会話の内容に、凜桜は顔を顰めずにはられない。

なんなのだらうこの男は——。

昨日から幾度となく繰り返してきた問いがここに来てまたもや浮き上がる。皇子

の言葉は凜桜を挑発しているようにも、侮辱しているようにも、そしてそのどちらでもないようにも聞こえる。

「お前の帝とやらに対する忠誠がその程度のものだって言うんなら、話は別だけど。ま、どうせ天神帝国の帝なんて大したことないでしょ。所詮は戦場に出たこともない世間知らずのお坊ちゃんだろうし」

前言撤回。これは明らかに侮辱だ。

「貴様……っ！」

思わず血が昇った頭で皇子の胸座を掴もうとする。

「おっと！」

軽い身のこなしで躲した皇子はそそくさと部屋を退散する。

「ま、どうせ食べたってそんな細い体じゃ俺に敵わないと思うけどね」

おちよくるようにそう言うと、焼き菓子のようなドアの向こう側に皇子は笑いながら消えていった。侍従も気まずそうに凜桜に一礼すると、慌てて皇子の後に続く。

しんと静まり返った部屋の中、凜桜は張り詰めていた息を一気に吐いた。全くあの男には昨日から振り回されてばかりだ。凜桜は寝台に座ったままただ陶器の皿に盛られた料理を眺める。どれもこれも見たことの無いものばかりだ。油で揚げられた何の肉だかわからないものと、茸と何やら赤い野菜の入ったシチューとがメインの膳であるらしい。米は当然無く、干し葡萄の入ったおがくずのように見える代物が目を引いた。あれはなんだろう——。食べ物を見ていると、ふと先程の皇子の『どうせ食べたって……』の言葉が蘇えり、苛立ちで頭がおかしくなりそうになるのを感じた。

あの男、絶対に許さない——。

疲労と緊張で摩耗した凜桜の神経が激烈な感情を呼び覚ます。

良いだろう。お前の挑発に乗ってやる。

俺は生きて、必ずお前を殺す。

一通り憤った後には先程まで微塵も感じていなかった空腹感が襲い来る。そういえば食料の限られた前線で最後に食べ物を口にしたのはもうだいぶ前のことだった気がする。それに、気づけば酷く喉が乾いていた。水の入った細いガラスの器を手にとって一口飲めば、二口、三口とごくごく飲んで、あっという間に空になる。冷たい水を飲んだことで胃に刺激が行ったのだろう。食欲がより一層出てきた気がして、恐る恐るおがくずじみたパン切れを少し口に入れてみる。干し葡萄の酸味の後には追いかける粉砂糖の甘さと何やら異国の香りとは混ざり合う。

「美味しい……」

思わずそう呟いた。

シチューを口に入れるとこれはまた香りが良い。コクがあるのにどこかあっさりとした風味で、久々に食べ物を口にする凜桜であってもこれならばいくらでも食べられそうである。膳に乗っているものを全て平らげると、温かくなった体はやがて強烈な眠気を覚え、凜桜は再び柔らかな寝台の上で意識を手放した。

ブラッド・フォン・ヴェルディアン。彼の本当の目的は、結局のところ何なのだろうか。夕陽の差し込む部屋で目覚めた凜桜の頭は幾分かすっきりしていて、元の冷静な思考を取り戻しつつある。窓からのオレンジ色の光に染まる豪華な天蓋を眺めながら凜桜は考える。皇子の突飛な言動に振り回されてきたせいで、そもそも何故一国の皇子が一捕虜の自分の前にわざわざ現れてこれまでのようなやり取りを行ったのかについて、よく考えていなかった。その理由についてあれこれ仮説を立ててみるが、結局どれも違うような気がしてならない。それに――。昨日口づけられた記憶があるせいで、確実にいらぬ説まで思い浮かんでしまう自分が恐ろしい。

無い。『それ』だけは絶対に無い。皇子が自分にそのような気があるなどと、考えるだけ時間の無駄だ。もしも万が一そうであった場合、それは完全に凜桜の許容範囲を超えた事態だ。敵国に捕虜にされた挙句同性に慰み者として扱われるなど、屈辱にも程がある。



きっと皇子は変人なのだ。普段から変わった言動で人を揶揄うのが好きで、周りを困らせては喜んでいる——。おそらくそういう人物なのだろう。それで、わざわざ皇子自ら軍の先頭に立ったり俺なんぞの元に来て油を売っていることの説明がつく。きっとそうに違いない。凜桜が己に言い聞かせるようにそう胸中で呟いたときだった。

「眠れた？」

耳元で低く囁かれ、凜桜は驚きのあまり跳ね起きそうになる。

「な……っ！」

見ると凜桜のすぐ隣にブラッド皇子が横になり、一緒の肌掛けの中で笑っている。ぎょっとして寝台から転げ落ちそうになるところを皇子に掴まれて、あろうことかその広い胸の中に抱き寄せられる。

「ちょ……！何……！」

ふわりと草原のように爽やかな香りが凜桜の鼻腔を掠める。

抵抗を試みるも、力の差は歴然。逞しい腕に捕らわれて、体がぴったりと皇子に密着してしまふ。凜桜は罨に掛かった小動物のように身を振った。

「そんな暴れるなって」

これが暴れずに居られるだろうか。

「別に何もしないよ」

信用ならない。尚も抵抗をやめようとしないう凛桜に、皇子が気まずそうにこう言った。

「き、昨日はその、悪かった……」

「昨日……？」

凛桜は腕の中で思わずブラッド皇子の顔を見る。

「ああ。お前を止めるためとは言え……、その、強引にして済まなかった」

心底申し訳なさそうな表情だ。

「え……」

まさかその件を今謝られるとは思ってもおらず、面食らう。しかし。

「こんな……。こんな状態で謝られたって、全然信じられない！」

自分の言っていることは誰が聞いても最もだろうと凜桜は思う。思わず大声で  
そう言い放ち、尚も目の前の男から逃れようと躍起になる。

「まあ、そうか……。それもそうだよな」

皇子はすんなりと肯定するも、相変わらず凜桜を離そうとはしない。

「でも、まあ、これはこれだ」

「……これはこれって……」

「つまり、俺は凜桜が好きなんだ」

「……」

話が飛ぶにも程がある。暫し絶句した後放った凜桜の声は心なしか震えてい  
た。

「……貴様……ふざけるのも大概にしろよ」

「いや、俺は本気だぞ」

皇子は真面目な顔でそう返してくる。

「凜桜、俺と付き合う気は無いか？」

「無い！」

そう言って腕を振り払いたかったが、やはり腕力では敵わない。

「くそ……！ 離せよ！」

じわじわと得体の知れない恐怖に蝕まれて、凜桜は必死に身を振る。

この男のことが本当にわからない。わからなすぎて怖いのだ。いや、正直これ以上わかりたくもないが。

「そうだ。凜桜、ゲームをしないか？」

抵抗に夢中になっていると、皇子はまたもや意外な言葉を口にした。

「……ゲーム？」

場に不似合いな言葉に凜桜は顔を顰める。相も変わらず次々に話が飛ぶ男だ。

「そうだ」

にやりと楽し気に笑って男は頷いた。

「お前は俺に思うことも多いようだし、ここは一つ剣闘をしようじゃないか。お前が勝てば、そうだな……。ユンヴァ島を天神帝国に返す。それに、何でも望みを聞くよ」

「なんだそれは……」

男の真意を量りかねる。

この男はただでさえ言動が読めない。今更どうこう言うことではないのかもしれないが、やはり凜桜は面食らってしまう。

「そ、そんなもの……。ここで剣闘などしたところで例え私が勝ったとして……お前なら私の身一つどうにだってできるだろう。……それに……」

この男のペースに乗せられまいと、何とか口先だけでも動かしてみせる。

「私が負けたときのお前の望みは一体何なんだ？」

ブラッドはよくぞ言ってくれたとばかりに子どもじみた笑顔を見せて説明する。

「率直に聞いてくれて話が早い。剣闘に関しては万全に公平を期すから安心してくれ。俺も剣士なんでな。こんなところで小賢しい真似をすれば男が廃るだろう。心配なら何人でも証人を付ける。正式な契約書を書いても構わない。それから俺が勝った場合だが……」

ブラッドは凜桜の目を見据えてこう言った。

「凜桜の躰が欲しいな。俺」

「は……？」

一瞬何を言われたのかわからず啞然としてしまう。

「今……、何と？」

「聞こえなかったか？俺は凜桜のこの躰が欲しいんだよ」

自分の、躰が欲しい。

凜桜は呆然となった後すぐに我に返り、再度身を振ってこの腕から逃れようとした。遠慮なく皇子の膝を蹴り飛ばす。

「痛……っ。凜桜、落ち着いてくれ」

「落ち着いてなどいられるか！」

ついに凜桜の中で何かが切れる。

「いい加減にしろよ！捕虜だからって、何でもこっちが言うこと聞くとでも思ってるのか？受けない！絶対そんな勝負受けないからな！それからこの腕離せ！」

「凜桜……、他の部屋まで聞こえるぞ。声を抑えてくれないか？」

「うるさい！だいたいどういう意味だ？か、躰が欲しいなんて！男が男に言う言葉じゃない！」

まあ、例え異性間であっても最低なことに変わりはないが。

「そんな硬いこと言わないで。まあ、」

そんなところも可愛いけど、と言いながら皇子はその武骨な手を凜桜の夜衣の間に滑り込ませる。

「な……！」

胸を直に触られびくりと体が慄く。

「決まってる。体が欲しいってのはこうやって……」

皇子の手があばらを辿る感覚にぞわりと全身が粟立つ。

「……っやめ……」

「凜桜のこともっと味わいたってことだよ」

白磁の肌を舐めるように弄まさぐられれば、むずむずとした感覚の中に一瞬甘い疼きが走った気がして、凜桜は慌てて飛びのいた。肌の感触を愉しむことに集中していた腕からは今度は簡単に逃れることができ、凜桜は僅かに安堵する。



「ひ……人を擲揶うのも大概にしろよ！」

皇子の居る寝台から降り、十分に距離を取った位置から激昂する。

「剣闘、受けない？ 良い話だと思うんだけどなあ」

警戒心剥き出しの凜桜に、尚も皇子は続ける。この余裕ぶった表情に余計に腹が立つ。

「だって、考えてもみてよ。運が良ければ、合法的に俺を殺せるかもしれないよ？ 剣闘中は武器を返そう。どんな攻撃もあり。それで俺がもし死んでも、周りには文句言わせない。それに、凜桜が勝てば何でも望みを聞くってのはかなりでかいと思うけどなあ」

「……何故そこまでして……」

「言ってるじゃん。凜桜の躰欲しいから」

「……それだけの為に……？」

「そ。それ以外に俺に目的は無いよ」

皇子は堂々と言い放つ。

そんな皇子に凜桜は不審の目を向けるのをやめない。

「……信じられないな。さっきから私のことを好きだの何だの……。そもそも昨日会ったばかりの者を相手に、一体何がわかるというんだ？」

「それは俺の直感だ」

皇子は淡々と説明する。

「まあ凜桜が驚くのも無理は無い。俺は生まれた時から勘が人に比べて異様に鋭かった。これまで自国の軍の戦術にもそれを活かしてきたくらいには。そして昨日。凜桜を戦場で一目見た瞬間、ぴんと来たよ。俺はこいつを好きになるってな」

「は？なんだそれは……」

あまりの暴論に途中まで真面目に聞いていた自分が情けなくなる。

「昨日お前を改めて城内で前にしたとき、案の定俺はお前に惚れた。……上手く言えないが、凜桜。お前には不思議な魅力がある」

「……そ……、それであんなことしたって言うのか……？」

「あれは……申し訳なかった。凜桜のこと止めたくて必死になっていたら、つい」

先程から凜桜に詫びるときはしゅんと叱られた犬のような表情をするのが、綺麗な顔に似合わず何だか可笑しい。それを見てそれまで緊迫していた神経が緩み思わず吹き出しそうになるのをぐっと堪えてから、凜桜は軽蔑したように言った。

「それで、今度は『躰が欲しい』と？『俺のことを好きになれ』ではないのだな。勿論私にそんな気は無いし、お前に何一つとして応じる義理も無いが……。いきなり躰が欲しいだなんて随分と不誠実じゃないか」

半ばやけになって凜桜は思っていることをずばずばと口にする。

「ああ。それは俺自身も充分承知しているよ」

皇子は落ち着いた様子で話を進める。

「凜桜。見ていたらわかるが、お前は祖国のことを心から愛している。たぶん今の凜桜は俺のことを……敵国の皇子のことを、好きにはなれない」

「……わかっているじゃないか……」

「ああ。だから、心が手に入らないのならば躰だけ欲しい」

「……最低だな」

皇子の思考に呆れ果てて、もはやこの男相手であればどんな罵声を浴びせても構わないような気分になってくる。いや、正直それだけではとても足りないが。

「ああ。もちろん心を完全に諦めるわけじゃないよ。まずは躰を手に入れて、俺から離れられないような躰にしまえば、後々凜桜は必ず俺のことを好きになるからね」

「……屑だな」

皇子のそれは完全に楽し気に夢を語る口調で、この状況に怒りすら湧いてこなくなっている自分が恐ろしい。

「まあ、凜桜が嫌だって言うなら剣闘は無しだな」

「と、当然だ！」

「考えてみたらそんな細い体で俺に勝てるわけないし」

凜桜はこの男への憤りがじわりと再燃するのを感じた。

「負けがわかってる勝負にわざわざ挑みたい奴もいないよな」

「ちょっと待て」

「何？」

はあ、と皇子は残念そうに溜息を吐く。

「凜桜の祖国に対する忠誠も、所詮その程度なんだろうし。兵士がこのレヴェルじゃ、帝とやらの程度も知れたものだな」

極めつけだった。見え透いた挑発だとわかってはいるのだが。

「お前なんかに負けるわけないだろ！ 良いだろう。受けて立つ。その代わり約束は守れ！」

そう叫んですぐに後悔したが、後の祭りだ。

「ありがとう」

余裕の笑みで返されて、ますます腸が煮えくり返る。

「勝負は明日の朝。九つの鐘が鳴る頃に迎えの者を寄越すよ」

上機嫌そうに部屋を出ていくブラッドの背中を凜桜は睨みつける。

「あ、そうそう」

扉の手前で皇子は思い出したように立ち止まる。

「歳は一緒なんだからさ、俺のこともブラッドって呼んでよ」

じゃ、と言って皇子は部屋を後にした。静まり返った部屋の中。緊張の糸が切れた瞬間、凜桜はブラッドの挑発にまんまと乗った自分の浅はかさに酷く落胆した。終始突飛な言動に振り回され、手の平の上で転がされてしまったことが悔しくてならない。しかし、あの男をこの手で撃ち黙らせてやりたいという本心もあり、すぐに明日の勝負に前向きな心を取り戻した。

「あの男……、絶対に許さん！」

勝負するからには必ず勝つ。

おそらくは凜桜の軍服に縫い付けてあった名札の生年月日を見たのだろう。先程歳は一緒だと言っていたから、あいつも俺と同じ十七歳なのだ。それならば尚更、体格の差はあれど負ける気がしない。

凜桜は握った拳に力を入れた。

「皇子！聞きましたぞ。なんでもあの東の国の捕虜と決闘をなさるそうじゃありませんか」

晚餐を終え、別棟に移るための渡り廊下の上でブラッドは初老の侍従に呼び止められた。

「ああ、爺やか。そうだが？」

「『そうだが？』じゃ、ありません！一体どうなさったんです？あ的一条とか言う捕虜が来てから、皇子は何かおかしいですぞ」

薄くなり始めた白髪頭がブラッドの目線の随分と下でまくし立てる。

「あの捕虜は何か訳ありなのですか？部屋もわざわざ皇子自ら準備したと聞きま

す。何か私めに隠していることがおありでしょう」

自分を心配してくれているのはわかるが過保護は相変わらずだと、ブラッドは内心溜息を吐く。

「別に良いでしょ、このくらい。俺は凜桜のこと好きになったの。だから部屋も用意したし、明日は決闘で凜桜が俺と遊んでくれるだけの話」

「な……、皇子！またそんなことを仰って。本当は隣国の姫様とのご縁談をまた先延ばしされたいだけのことでしょ！悪ふざけも度を超すと皆から見放されますぞ！」

皇子を幼い頃から世話してきたこの侍従は、他の者達に比べ随分と遠慮なくブラッドに物を言う。

「ああ、あの縁談ね。最初から興味無いよそんなの。心配しないで。凜桜のことは本当に好きになっちゃったんだもん。仕方ないよ」

「な……！それはそれでなりませんぞ！一国の皇子が敵軍の捕虜に入れ込むなどと……。それに、決闘ではこの国の権利諸々をお賭けになるとか……。国王であるお父上には一体何と申し上げるおつもりなのです？今すぐこんなこと



はおやめなさいませ！」

「んー、無理。それに、あの人はどうせ明日も市街地の見回りとか言って女漁りに行くんでしょ。城に居ないから大丈夫」

「皇子！」

一際焦ったように侍従が小声でブラッドを窘める。

「何？もう皆このくらい知ってるでしょ。剣闘のことだって、そんなに心配しなくても大丈夫。爺やは明日の決闘で俺が負けるとでも思ってるの？心外だなあ」

「そ、そんな。皇子の腕が信じられないなどということは、万に一つもありません……」

「じゃ、問題ないね」

「問題は大有りです！」

「爺や。俺さ、実父の王も昔からあんなんだし、昔からほったらかされて育った割には、結構まともに成長したと思うんだよね。ま、それは爺や達がちゃんと親に

代わって面倒見てくれたからってのはわかってるけど」

「……はあ」

ブラッドの父は王らしからぬ性質で、ブラッドの言う通りの人物であることはこの侍従も重々承知している。母親である妃も放任主義で、実子のブラッドに対する態度もどこか上辺だけのものだ。王族の地位と財産だけを目当てに王と婚姻したのは、誰が見ても明らかだった。

「俺、実は昔からちょっと寂しいんだよね。皇子ってだけで同年代の奴らにも気遣われるしさ。だからさ、たまに新しくできた友達と城の中で燥ぐくらい許してほしいな」

さすがの爺やもこれには返す言葉が無いと見える。白い髭の下にある口をもごもごさせ、何か言いたげな表情でこちらを見つめている。

「明日の朝、朝食が終わった後声を掛けるよ。あいつを部屋まで迎えに行ってくれ。剣闘広場で待ってるから。頼んだよ」

この悪戯っぽい表情は昔から変わっていない。言いたいことだけ言って颯爽と去っていく皇子を、困り果てた顔で侍従は見送った。

## 刀と剣

晩と次の日の朝と、食事は部屋に運ばれてきた。食べたことのない味に最初は少し戸惑ったが、口に入れてみればどれも美味で凜桜は感心してしまう。

皇子の言っていた通り、城の九つの鐘がなる頃侍従が凜桜の部屋を訪れた。湯浴みのできる部屋に通されて体を洗った後、準備されていた凜桜が元々着用していた軍服に着替える。軍服は綺麗に洗われており、石鹸の香りがした。

城は幾つもの棟で構成されているようだ。侍従について何度か窓の無い渡り廊下を渡る途中、大きな湖が城下の緑の先に横たわるのが見えた。湖の向こう側には森が広がり、その更に向こうはなだらかな山だ。民の暮らす町らしきものは見当たらない。城内の別の棟からなら見えるだろうか。凜桜はこの国に来て初めてそんなことを考える。城の造りは石がメインで、床も天井も柱も灰色だ。ぱっと見は皇族の住まいにしては飾り気が無いように見える。しかしよく見るとそこかしこに細やかな装飾が施されている。唐草模様の彫刻が施された柱に美しい絵の描かれた天井。天井の絵画にはこの国の歴史が描かれている。城全体のバランスとして飾り気が過ぎない様が好ましく、敵国の物だとわかっていながらもつい見惚れてしまう。任務で前線に送られるまで祖国は疎か実家のある帝都すらあまり離れたことの無かった凜桜である。幼い頃夏季休暇に父母に連れられ隣県の海辺へ避暑旅行へ行ったくらいで、後は外の世界は教本の中でしか知らない。

あまりきよろきよろしていても行儀が悪いような気がして、凜桜は正面に向き直

り決闘に向けて気を引き締める。それからも城内をさまざまな方向に歩く。部屋への帰り道がわからなくなるほどに練り歩いた頃、ようやく剣闘広場に辿り着いた。そこは四方を棟に囲まれ土が敷き詰められた中庭のような場所だった。普段はあまり使われることもないのか人気がなく静かな場所だ。建物の壁と地面との間に、オレンジ色の小さな花がぽつぽつと咲いている。

ブラッドは先に来ていて、凜桜に一枚の書類を渡してくる。

「はい。昨日言ってた契約書だよ。目を通して、納得したらサインしてね」

わざわざ天神帝国の言語でブラッドが作らせたらしい契約書に丁寧に目を通し、差し出された羽ペンでサインをする。

契約書には昨日ブラッドが話していたことがそのままわかりやすい言葉で記載されていた。

「証人も準備したよ」

見ると先程まで閑散としていた四方の棟のあちこちの窓から、人がこの広場を見下ろしている。皆この城の使用人のようだ。

「決闘するって言ったら予想以上に集まったなあ」

皇子が楽しそうに言った。

確かに、これだけの人数に見られていれば、ずる賢い真似をした場合誰か一人は気づくだろう。

しかし――。

馬鹿げている。凧桜は内心独り言ちた。いくら契約書や証人を準備したところで、所詮はこの男の用意した物だということに変わりはない。今いるこの地が皇子の領域である以上、どうにだってこの男の好きなようにできるのだ。しかし、あれこれ考えを巡らせたところでこの男のことである。いずれ自分の好きなように事を運ばれる可能性は大いにある。それならば、自らの手で祖国の恥辱を晴らすには、この機を逃すわけにはいかない。

お前の口車に乗ってやる。

凧桜は侍従が恭しく差し出した刀を受け取る。鉄のずしりとした冷たい重みが懐かしい。

四方を建物に囲まれているせいだろうか。朝だというのにここはどこか肌寒い。暖かな陽は壁に阻まれて届かず、広場の中で立てる音だけが寒々と壁に大きく反響する。

凧桜は刀の下げ緒に親指の腹を当てた。いつからかまじないのように、稽古や出陣の前にこうするのが凧桜の癖になっていた。紫色の唐打紐の凸凹の感触を確かめるように親指をゆっくりと動かす。

気づけばかなりの数の観客が四方の棟の窓からこちらを見下ろしている。異国の言葉で何か二人に野次を飛ばす者もいる。

「勝負を受けてくれて感謝するよ」

ブラッドはにっこり笑むとそう言った。

凜桜は黙ってブラッドを睨み返す。

「あ、そうそう。凜桜に怪我させちゃいけないし、おれは木剣にするね」

そう言う皇子の右手には、既に木剣が握られていた。真剣での撃ち合いを想像していた凜桜は拍子抜けしたが、少しすると何だか無性に腹が立ってきた。

「皇子！お前は私を舐めているのか？」

「違うよ。さっきも言ったけどただ俺は凜桜に怪我してほしくないだけ」

「馬鹿を言うな！お前も真剣を使え。こっちは太刀なんだぞ！」

「何で？別にいいじゃん。凜桜が損するわけじゃないんだしさ」

「対等でない勝負に意味など無い。こういうことは、きちんとしたい！」

はっきり言い放つと、ブラッドは瞬時唾然とした表情を浮かべたが、すぐに可

笑しそうに腹を振って笑い出した。

「な、何笑ってるんだ……！」

「はは。いや、今俺も気づいた……。凜桜のそういうところも含めて好きなんだ、俺。俺の周りには今までにいなかったタイプだ。あは、あははは……」

「何だそれは……」

怪訝そうな表情を浮かべる凜桜をよそに一頻り笑うと、ブラッドはふと思い出したように

「ああ、」

と言った。

「そういえば……、昔一人だけ居たな。凜桜に少し似てるのが……」

どうやら独り言のようだ。笑い終えた目には気のせいか先程までは無かった影があるように見える。だが、今は凜桜にとってそんなことどうだって良いことだ。

「とにかく！真剣を使え！でないとその勝負を無しにするからな！」

「わかったわかった。俺も真剣を使うよ」

観念したようで、ブラッドは木剣を傍に控えていた侍従に渡すと、腰のベルトからサーベルを抜き放った。銀の刃が陽光を眩く照り返す。

「これで、お相手させていただきます」

おどけた調子でそう言うと、身の前に剣を構えてみせた。何をふざけているのだと怒鳴りかけそうになったが、剣を構えたブラッドの風貌は先程の軽薄な印象とは打って変わって『剣士』としての威厳と言い得ぬ迫力があり、凜桜は思わず口を噤んだ。その姿は初めて目にした戦場での雄々しくも神々しい姿を想起させた。あの場で少し剣を交えただけでも、この男が余程の剣の使い手であることが凜桜にもわかった。

——だが、負けない。

凜桜は引き締め始めた場内の空気の中、刀を抜き放つ。凜桜の大きな黒い瞳も固く結ばれた口元も白磁のような肌も、まるでこの刀を構えるために詠えたのではと疑うほどにその所作も含めて美しい。ブラッドだけでなくその場にいた



誰もがこの光景に心を奪われたのは言うまでもない。

勝負の火蓋は切って落とされた。

先に凜桜が動く。久々に味わう靴裏で土の碎ける感覚。勢いよくブラッドの左脇腹を狙う。相手の体に武器が当たるか、相手が降参すればこちらの勝ちだ。要は一本取れば良い。相手の体格の方が上だろうと、異国の剣技を見せつけられようと、そんなものは関係ない。

——絶対にこの男を殺す。

しかし実際、体力では数段相手が上だろうから、持久戦に持ち込まれると厄介だ。早々に決着をつけたい。

凜桜の最初の一撃を、果たして皇子は易々と躲した。やはりそう簡単にはいかないようである。それでもめげずに凜桜は力強く刀を振り続けた。ブラッド皇子はというと躲してばかりで、未だ一度もサーベルを凜桜へ向けていない。

それにしても、金糸の髪を靡かせ剣を握る目の前の男には、得も言われぬ美しさがある。絵画の中の英雄のように、太陽や草原といった雄大な自然を想起させる雄々しさ。そして凜桜の剣戟を避けながらも時々こりと笑う顔には相手を惑わせる色香がある。こちらの攻撃をものともしていない表情にはぞっとするが、その妖しげな雰囲気すら見惚れてしまいそうになる。翡翠の瞳と目が合えば吸い込まれてしまうような気すらして、凜桜は皇子の顔から目を逸らした。

「やるな。凜桜。俺をここまで追い詰めたのはお前が初めてだぞ」

避けてばかりで後退していた皇子がついに建物の壁に背を付ける。もらった、とばかりに凜桜は刀を皇子の左肩目掛けて突き入れた。

しかし——。がん、と激しい音が広場に反響した。ブラッドの左肩擦れ擦れの位置で凜桜の刀をサーベルが弾き返したのだ。余りの力強さに凜桜は後ろへよろめきながら、腕が尋常でない程痺れるのを感じた。

なんだこれは——。

なんとか体勢を立て直す。

「凜桜、お前はやっぱり強い。ますます惚れ直したよ」

そう言ったブラッドの息には微塵の乱れも無い。

「戯言に……耳を貸すつもりは無い！」

再びブラッドの懐に攻め入る凜桜の刀をブラッドは的確にサーベルで打ち流す。彼の身のこなしは大きな図体に似合わず軽々としていて、それでいて刀を跳ね返す打撃は信じられない程重い。これほどの剣士には母国でもなかなか出会えるものではない。

類まれなる技を持つ者との撃ち合いに、心なしか自分の中の血が騒ぐのを凜桜は感じていた。面白い——。不覚にもそう感じている自分がいる。

凜桜は諦めず痺れた腕で刀を振り続ける。しかしサーベルに阻まれて、なか

なか皇子には届かない。一振り一振りこぞ、という箇所には打ち込んである筈なのに、ブラッドにはどれも見透かされているかのように受け流されてしまうのだ。持久戦に持ち込ませないために初めから激しい攻めに徹していると言うのに、今のところ一向に芳しい成果が得られていないことに凜桜は不安を感じ始めていた。

それでも――。

絶対この男にだけは負けたくない！

が、と一際強く凜桜が皇子のサーベルを薙ぎ払うと、初めてブラッドは重心を崩しよろめいた。

「おっと！」

――今だ。

凜桜はすかさず刀を皇子のから空きの脇へ突き込んだ。はずだった。

「なんてな」

耳元で囁く声は悪魔のよう。刀を持つ右手首を掴まれ、凜桜は自分の息が喉の奥でひゅっと音を立てるのを聞いた。慌てて体勢を立て直そうとしてももう遅い。ぎり、と音がする程手首を握られ、思わず刀を手放してしまいそうになる。けれど。例え腕が折れても自分の家の誇りである、父から受け継いだ刀だけは手

放したくない。凜桜は意識を立て直すと、渾身の力で皇子の鳩尾を蹴り飛ばした。

「かは……っ」

皇子は今度こそ本当に堪えたいが、凜桜の右手は掴んだままだ。そのまま素早い動作で凜桜を俯せに組み伏せる。

「……っ！」

首筋にぞくりとした冷たさを感じて、凜桜の白い肌が栗立った。

見るとサーベルの剣身の平たい面——つまりは刃の無い箇所をぴったり首の動脈付近に当てられていた。

「剣が体に当たったから、俺の勝ちだな」

審判をしていた侍従がブラッドの始めの立ち位置側の手を掲げると、観衆が一斉に沸いた。

皇子は凜桜を解放する。

「お前が予想以上に強くてつい本気を出してしまった。すまない」

おそらく右手のことを言っているのだ。

「おい誰か！すまないが急いで冷やす物を持ってきてくれ！」

皇子は歓声を送っている侍従たちに呼びかける。

負けた――。

凜桜は立ち上がると半ば呆然と、渴いた口の中でそう呟く。上がった息は未だ治まらない。対して息一つ乱れていない皇子を眺めながら、凜桜は不思議な感覚に苛まれた。負けて悔しいだとか、この後約束通り自分の身を差し出さねばならないだとか、祖国の名誉を守れなかつたとか、今、自分が考えるべきはそういうことであるはずだ。けれど、何故――。俺は何故、この男ともう一戦交えたい、そしてもっといろんな彼を見たいなどと思っているのだろう。

皇子に負けたことが悔しくてどうしようもない気持ちもあるにはある。しかし、それ以上に目の前の男の何かに惹きつけられ、この男のこと自体が酷く気になるのだ。何がここまで自分をこの男に惹きつけるのだろうか――。凜桜はしばらく考えるもその答えが出ず、きっとここまで強い剣士を見たのは初めてだから単純に彼の武人としての術に自分は見惚れたのだと結論付けた。事実、彼の強さは悔しいことに本物だったのだから。

侍従が用意してくれた氷水のお陰で、手首の痛みはすっかり引いた。それを見て皇子が傍らでほっとしたような表情を浮かべるのを、凜桜はまた不思議な気持ちで眺めるのであった。

## 散らされる花

「で、俺が勝ったわけだけど」

帰り道がわからないだろうからと凜桜に付き添い一緒に戻ってきた皇子は、部屋に入り後ろ手にドアを締めるなりそう言った。

「……男に二言は無い。やりたいのなら、さっさとやれ」

凜桜は皇子の目も見ずに、吐き捨てるようにそう言った。今更負けたことに対していくら歯噛みしたって無駄なことだ。本当は今だって勝負に負けたことにひどく落胆している。祖国の名誉を回復し、島を奪還できたかもしれない機会をみすみす失ったのみならず、自らの身をこの男に差し出さなければならないのだから。しかし、約束は約束だ。それに、これ以上落ち込んでいる顔をこの男に晒して揶揄われるというのも癪だと思ふ。

「はは、ムードの欠片も無いね」

「……煩い……」

「まあそういうところも可愛いよ、凜桜は」

ブラッドの武骨な手が凜桜の女のように細い頤を掬い上げる。凜桜は思わずぎゅっと目を瞑った。ゆっくりと愛でるように口づけられれば、あの草原のように爽やかな香りが唇から入り広がっていく。

「……っ！」

気づけば口づけたまま腰に手を回されていて、逃げられないよう体を固定されている。一度約束した以上相手を拒むつもりはなかったが、それでもこの異様な状況に凜桜の体は慄いた。

——大丈夫。すぐ終わる。こんなの少し我慢すれば、きっとすぐだ。

凜桜は心の中で繰り返した。

高鳴る心臓の音が煩い。けれどそれは嫌悪感からくるものではなかった。敵の男に口づけられているというのに、それに対する不快感は不思議なことに全く無い。ただ、緊張と不安による自分の鼓動だけが次第に大きくなっていく。重ねられた唇を伝って、自分の脈がこの男に伝わってしまうのではないかと思う程に。

唇を味わうように何度も食まれ、凜桜が熱に浮かされたようになっていると、唐突に歯列を割ってブラッドの厚い舌が侵入し、凜桜は驚きのあまり目を見開いた。

「んう……っ」

口の中の形を確かめるように舌を動かされれば、ブラッドの肉厚な舌は狭い口内を満たし、凜桜は体内の粘膜を弄ばれる感覚に慄いた。思わず体がブラッドから逃れようと振れるが、腰をしっかりと捕らえられていて逃げ場が無い。

「んん……っ」

凜桜の中をじっくり味わうように舌を動かされる度に何故だか体が跳ねてしまうのが酷く恥ずかしい。頭の奥がぼうっとする。上顎をざらりとした舌先で擦られると、体のどこか深い場所がずくんと疼いたような気がして、凜桜はぞっとする。

何度も口内を蹂躪した後、ブラッドは漸く凜桜を解放した。やっと解放された凜桜は肩が上下するほど息をした。握られた手が、捕らえられた腰が、皇子に密着した胸が、全部熱かった。

力の抜けた体をブラッドに運ばれて、寝台の上に仰向きに寝かされると、再び上に覆い被さるようにして口づけられる。

「っん……っ」

また口の中を厚い舌で掻き混ぜられて、ぞわぞわと背筋に得体の知れない痺れが這う。薄く目を開けば、ブラッドの翡翠の瞳と視線がぶつかる。深緑の瞳孔の奥底に情欲に燻った火が燃えている。普段の透き通った瞳でも、剣闘で目にした勇猛なそれでもなく、今はただ凜桜一人だけを欲望の中に見る瞳。



やはりこの男は怖い。凜桜は今更ながら自分の置かれた状態に恐怖を禁じえなかった。捕虜となっただけでも大失態なのに、その上敵国の皇子とこのようにまぐわうなどどこの誰が想像するだろうか。しかも相手は男ときた。一体全体、これ以上の屈辱がこの世にあるのだろうか。やはりいっそのこと、先程の剣闘で殺してくれればどんなに良かったことか——。禁忌を犯す罪悪感と未知の領域に投げ込まれる衝撃とで、本当に頭がどうにかなってしまいそうだ。

「んん……、う、ん……、」

息を継ぐ間もわからぬ程の口づけに凜桜の思考は遮断される。酸素を求めて唇を緩めれば更に深くブラッドの舌が入ってきて、堪能するように歯や喉奥までもまさぐられる。

「んあ……ん……、んう……、」

奥までブラッドの舌に犯され、紅潮した頬に涙が伝う。それなのに喉奥近くの上顎をざらり、とまた擦られると、全身が妙に熱持ち、不可解な疼きが背筋や脇腹を這うので落ち着かない。気づけば全身を汗が覆っていて、息はまるで感冒の時のように熱い。

「んん、……っ、んうっ……、」

凜桜の口角から唾液が伝うのも構わず、皇子の口づけは次第に激しさを増す。食るように凜桜の薄い舌に絡みついてはその抵抗を楽しむように弄ぶ。

「可愛い舌だね」

久方ぶりに凜桜を口づけから解放したブラッドが嬉し気に笑む。はあはあと息をする凜桜の唇に手をやると親指と人差し指を突き入れて舌を掴む。凜桜の舌は捕らえられた稚魚のようにのたうった。その反応にブラッドの瞳が嗜虐の愉悦を孕む。

「もっとよく見せて」

更に開口させられ濡れた舌を引っ張り出される。唾液が幾筋も顎を伝う感覚。普段見えない場所にしまわれている箇所を引き出され空気に晒される感覚に、妙な羞恥と恐怖を感じる。この男なら今ここでこの舌を引きちぎることもできるだろう——。凜桜は先程の剣闘を思い出す。逞しい肉体に組み伏せられたとき、そして自らの負けが確定したとき、自分が一体本当は何を感じていたのかをつぶさに思い出してしまう。思い出したくない。あんなのは、疲れた時に見るまやかした。

凜桜は心の中でかぶりを振った。一瞬でもこの男のことを、容姿や剣術だけではない、もっと他の意味で魅力的に思うことなどあるはずない。そんなのは凜桜の

自尊心が許さない。

引き出された舌にブラッドの舌が押し当てられて、再度凜桜の口内はブラッドの舌の餌食になる。何度も角度を変えて深く口づけながら、ブラッドは凜桜の軍服を引き剥がす。度重なる口づけに凜桜の抵抗は弱々しく、あっと言う間に上下の衣服を剥ぎ取られてしまった。外気に触れた陶器のように滑らかな肌が僅かな寒さに粟立った。

「少し立ってるな……」

心なしか嬉し気にそう言うと、ブラッドは凜桜の熱持った中心に下着の上から触れた。

「……やめ……っ」

反射的にブラッドの腕を押し退けようとしてしまう。己の身を差し出すと約束したからにはなされるがまま大人しくしていようと決めていた凜桜だったが、ここに来て再び恐怖と不安が込み上げる。

「安心して」

ブラッドは僅かに上気した顔を綻ばせると、再び凜桜に口づけた。ブラッドに

口づけられながら中心をやわやわと下着の上から揉みあげられる。息が尋常でない程に乱れていく。

「ん……っ、ああ……」

ますます硬度を持ったそこが熱くて堪らない。無情にもブラッドが凜桜の下着を取り去った。全裸になった挙句、最も恥ずべき場所が立ち上がっているところを見られるなど、羞恥で発狂してしまいそうだ。いっそ、このまま羞恥で気を失えたらどんなに良いだろう。

ブラッドは首筋や鎖骨にキスを落としながら、凜桜の躰をあちこち触って愉しんでいる。あばら骨や腹の上を撫でられる度、得体の知れないぞわぞわとした波がそこから広がって、最終的に凜桜の中心へと辿り着く。触られる度熱持つ体がびくびくと震えてしまうのをやめたいのにやめられない。

「あ……、ああ……っ」

先程から腰が揺れてしまって仕方がない。立ち上がった中心が新たな刺激を求め、先端から切なげに透明な液を零す。太腿の内側に降りてきたブラッドの愛撫が足の付け根を這う。そこからあらぬ場所へと指を突き入れられて、凜桜は思わず仰け反った。

「ひ……っ」

ブラッドは凜桜の後孔に突き入れた中指をゆっくりその中へ沈めていく。ずぶずぶと体内に異物が侵入する感覚に凜桜は総毛立つ。

第二関節までその太い指を中に埋めると、  
ブラッドは探るように凜桜の内側をなぞった。

「あ……っ、い、いや……」

奇妙な感覚に身を振れば、余計にブラッドの指が中で擦れてしまっていて刺激をまた一つ、二つと生んでしまう。ブラッドは凜桜の反応を愉しむように指を前後左右に動かし始めた。次第に激しくなるその動きに、凜桜の体は益々焦れて腰をまた無意識に動かしてしまふ。そして、指が柔らかなある一点に触れた瞬間――。

「うあっ……！」

凜桜の体が一際大きく跳ねた。

何だ今のは――。

触られた中が妙な熱を持って仕方がない。

「なるほど。凜桜はここが好<sup>い</sup>いのか」

ブラッドがにやりと、意地の悪い笑みを浮かべた。抵抗する間もなく、ぐ、ともう一本指が入ってきて、先程と同じ箇所を二本の指で同時に圧迫される。

「ひ……っ！あああっ！」

「おお……凄<sup>い</sup>い声だな」

感心したようにブラッドは凜桜を見つめている。

「そろそろ挿入<sup>いれ</sup>るぞ」

言葉と共にブラッドは自らの前を寛げて、自身を取り出した。

「……え」

凜桜は驚愕した。

赤黒く興奮を湛え硬くそそり立つ剛直——。その幹の逞しさたるや、想像を遥かに超えた逸物で凜桜は思わず目を剥いた。

体格の大きさに比例して中心も大きいというのは確かにわかるが、それにした

って限度というものがある。

「ちょ、ちょっと待ってられないか……」

恐ろしくて考えたくもないが、こんなものを一体どうすると言うのだろう。思わず腰が引けて寝台の上方に退こうとするが、すぐにブラッドの腕に捕らえられてしまう。

「悪いがもう耐えきれそうにない」

ブラッドが凜桜の片脚を持ち上げる。大きく恥部を晒す形となり、濡れそぼった中心や蜜に濡れた後孔が益々露わになる。

「や、やだ……っ」

凜桜の制止も聞かず、ブラッドは蜜壺の入り口に灼熱をあてがうと一息に凜桜の中へと突き入れた。

「あああああああっ」

肉を裂かれる衝撃に殆ど悲鳴に近い声が出る。それに、先程押されたときに

感じた箇所を、指の比でない質量に擦り潰されたものだから堪ったものではない。最奥まで突き入れられて、みちみちと音がするのではと思う程凜桜の中をブラッドが満たしてくる。

「ひ……」

どくどくと脈打つブラッドがずると引き戻す感覚にすら体が跳ね、鼓動が早鐘を打つ。

「や……」

涙に濡れた目でかぶりを振って抵抗の意を表すが、ブラッドには通じないようだ。凜桜のどろついた粘膜の中、一度引き戻されたそれが再び勢いよく最奥を穿つ。

「ひ……っ！ああああああ……っ」

焼け付くような快樂で刻印され、凜桜の内側が歓喜する。津波のような快感に恐怖を覚え、逃れたいのにブラッドの手が凜桜の細い腰を掴んで離さない。その逞しい腕にがっちり固定されてしまえば、成す術もなく拷問のように襲い来る快樂を受け入れるしかない。



「や……っ、もう……、動くな……っ」

猛火のような快感が肚の中で暴れ、全身を焼き尽くす。これ以上は無理だと必死にかぶりを振って懇願するが、その努力も虚しい。今度はゆっくりと入ってきたブラッドが、凜桜の媚肉を確かな質量で切り拓いていく。

「っは、あ……っ、や……、あああ……っ」

内壁にじっくりとブラッドの雄を擦りつけられれば、腰が焦れたように揺れてしまつて恥ずかしい。羞恥と強すぎる快樂に今すぐ消え入りたい程なのに、躰はひとりでの目の前の男を求めてしまう。

「っうあ……っつ！」

道半ばまでゆったりしていた挿入から唐突に奥に突き入れられ、凜桜は仰のいてその躰を震わせた。背中が反り腰をブラッドに突き出すような形になってしまい、再び恥辱が凜桜を襲うが、もうそれどころではない。ブラッドは奥まで埋め<sup>うず</sup>た剛直を再びずるりと抜き去ると、今度は立て続けに激しい抜き差しを始める。

「ああっ、……あ、あっ、ああっ、あ、あああっ」

思わず漏れる嬌声にブラッドが口の片端を吊り上げる。

「や、ああ……っ！も……、やめ……っ、ああ、あつ、あ、っああ！」

涙なのか汗なのか唾液なのか判然としない水気にぐしょぐしょになった凜桜の  
おもて  
面が快樂に歪む。髪は乱れ、普段隠れている額が露わになる。白い肌に黒髪  
が汗で貼り付く様や身をくねらせてよがる様は、見る者の劣情を酷く煽り立てた。

「……っやめ、も……、ああっ……っ、ああああっ、あああつ、あ、ああ、あ……っ、  
も……、ゆるし……」

快樂の坩堝に投げ込まれ、このままではおかしくなってしまうと本気で危惧す  
る。しかしブラッドの中心は未だ衰える気配など微塵も無く、延々と凜桜の中を  
拓いては抜き、また拓いては抜きを繰り返している。

「っああ……。お……。皇子……。お願いだ！……。ああっ、もう終わりに……。  
っ！……。っあああつ」

激しい衝撃と快樂に声が溢れ、喋ることさえままならない。

「だから、皇子じゃなくて、ブラッドって、呼んで。凜桜」

挿入を尚も続けながらブラッドは返す。今度は凜桜の腰を少し持ち上げ、好い所に強く当たるよう擦り付けてくる。

「……っ！あああああああっ」

前後もわからず乱れながら、凜桜は寝台の上でのたうった。

「ひ……っ、ほんと……、やめ……っ」

息も絶え絶えに訴えかけるもブラッドは留まる事をまるで知らない。最も敏感な内壁の膨らみを硬い先端でごりごりと抉られれば狂気的な淫楽が脳天まで突き抜け、凜桜の全身をわななかせる。

「ね。ブラッドって呼んで」

凜桜の弱いところを集中的に攻めながら、ブラッドは柔らかく笑みみせる。

「あああ……っ！呼ぶ……呼ぶから……っ！ブラッド……、やめ……っ、あああ  
ああ、あ！」

「ありがとう。可愛いよ」

ブラッドは腰の動きを緩める気配は全く無く、あろうことか再び凜桜の中を味わうためその激しさを増していく。

「あああ…ああ…っ！ブラッド……、ブラッド……、あああつ、あつ、あああ、やだ……、も……、いや、あああつ、あ、ああ……」

必死の懇願が報われることは無い。何度も拓かれた凜桜の隘路が蜜を溢れさせ狂喜する。

「あ、あああつ、あああああ……っ！」

一際大きな快感の波がどくと凜桜の中心に込み上げた。白濁を散らし、凜桜はブラッドのものを啜え込んだままびくんびくんと何度も腰を跳ねさせながら達していた。

「は……あ……、ああ……っ」

脈動によって快樂の余韻が凜桜自身を中心にして波のように全身へ広がる。その余波に心を落ち着かせる間も無く、ブラッドが再び中で動き出す。

「は……？ちよ、嘘だろ……、ああ……っ」

呂律の回らなくなった舌で抵抗しかけるも、ブラッドは聞き入れてくれない。

「すまない……。今日はお前を離せそうにない」

最初と変わらず奮い立ったままのブラッド自身に再び内壁を行き来されれば、せっかく鎮まりかけていた体内の火が再び燃え上がる。

「やだ……っ、ああ、ああああ！」

全身が快樂の炎に焼き切れてしまいそうで、凜桜は戦慄する。

「あ、あああ、あああああああっ」

「そうだ。もっと凜桜の声が聞きたい。凜桜は見た目や性格だけでなく声も可愛い」

それからまた何度となく奥を穿たれて、数えきれない程の快樂を刻まれる。そうしてもうどのくらい時が経ったのだろうか——。不意にこんこん、と部屋のドアをノックする音が聞こえて、凜桜は青ざめて声の漏れる口を両の手で塞いだ。

「……？こんな時に誰だ」

ブラッドは腰の動きを止めずに呟く。ドアノブががちゃりと音を立てる。が、ブラッドが掛けた鍵のせいで扉が開かれることは無い。凜桜は内心ほっと胸を撫で下ろす。しかし扉の向こう側の者は諦めず、再度扉をノックしながら何事かをこちらに呼び掛けている。ヴェルディアンという言葉で、凜桜には何と言っているのかわからない。するとブラッドも扉の向こう側にヴェルディアンの言葉で返事をした。ブラッドはその間も凜桜の中への抜き差しをしたままで、こんな状態をもしかしたら誰かに勘づかれるのではと思うと凜桜は気が気でならなかった。思わず声が漏れそうになるのを必死に喉の奥で抑え込む。

「……行ったか」

ノックしてきた人物は諦めたようで、廊下を足早に去っていく音が響く。凜桜の怪訝そうな表情に気づき、さすがにブラッドは腰の動きを止めて言った。

「全く。目の前にこんなに可愛い恋人が居るってのに進軍なんてしてる場合じゃないよね」

「は……？」

凜桜は困惑して尋ねる。

「何か……任務の連絡だったのか？」

「ああ。そうだ。天神帝国軍がまた新たな部隊をこちらに送りこんだらしい。応戦するからいつものように兵の指揮を執るように言われた」

「それで……何と返したんだ？」

「『悪いが今忙しくてそれどころじゃない』って言ったんだ」

凜桜は瞬時呆れて二の句が継げずにいたが、すぐ我に返って

「馬鹿じゃないのか」

と一蹴した。

「お前……それでも皇子なのか？ 攻め込まれたらどうするんだ？」

「俺が行かなくても、誰か代わりやるでしょ」

「そういう問題じゃ、ないだろ……。お前がそんなやつだなんて、思わなかったぞ……」

自分の今の状況も忘れ、凜桜は困惑して目の前の男に問いかける。

「一体お前は、どういうつもりなんだ……。？私の国をヴェルディアンの皇子として、憎んでいるだろう？……何故進軍に協力しない？」

そうブラッドに詰問する。

「凜桜は優しいね」

柔らかく笑むと、ブラッドは止めていた腰を再び奥へ進めだす。

「自分の国の心配よりも、ヴェルディアンの心配してくれるんだ？」

「ち……。違う……。そういうことじゃ……」

ブラッドの剛直が凜桜の蜜の中を掻き分ける。



「俺は不真面目で不誠実な男だよ。好きになった人も、こんな形でしか手に入  
れられないし。正直軍のことなんて今はどうでもいいね。欲しいものはここに  
ある」

自虐のつもりなのか薄く笑みを湛えながら凜桜の中を最奥まで突き進む。再  
び中を満たされる感覚に内壁が蠕動し、新たなる熱を生む。

「や、やめ……っ」

「それとも何？ 凜桜は俺のこと、意外と高く買ってくれてたのかな」

「っ……！ 違……っ」

口では咄嗟に否定したものの、実際はブラッドの言う通りな気がしなくもない自  
分自身が悍ましい。

「ね。邪魔者も居なくなったことだし、こっちに集中しよう、凜桜」

ブラッドは自身を道半ばまで引き抜くと、再びずん、と凜桜の最奥に攻め入れ  
た。

「あああああああっ」

骨に響くほど強く穿たれ、凜桜は悶絶した。痙攣する脚の付け根を、棹の先端と後孔から滴る液がしとどに濡らす。

「ねえ凜桜、ちょっとは俺のこと好きになった？」

「……っお、お前なんか……っ」

「お前なんか？」

「……っ好きに、なるわけ……ないだろ！」

涙目になり喉を引きつらせながら凜桜は反論する。

「やっぱりそうだよねえ」

ブラッドは心底残念そうな顔をする。

「凜桜は自分の気持ち曲げなさそうだもんね。まあ俺はそういうところも好きなんだけど」

ブラッドに覆い被るようにして口づけられ、もう一度非情な快樂の劍に切り裂かれる。

「あああああ……っ」

凜桜は堪らず白濁を迸らせ、がくんがくんと何度も腰を突き出すように痙攣させながら意識を手放した。

酷い喉の渴きに目を覚ます。薄暗い視界の中、身を振ると下半身を中心に凄まじい倦怠感が襲った。

「……う……」

思わず漏れた呻きが有り得ない程掠れていた。

隣にブラッドはおらず、代わりに寝台脇の台に水差しとガラスの容器が置かれていた。覚束ない手を伸ばし、何とか水を注ぎ口にする。冷たい水が心地よく喉を潤し、火照った身に落ちていく。人心地つくと、先刻の記憶がまざまざと蘇ってきて凜桜の羞恥に火をつけた。改めて考えるまでもなく、とんでもないことになってしまった。状況を整理したくて頭を動かそうとするも、身をブラッドに奪われた衝撃が強すぎてまともに物が考えられない。最初は男同士でなど、凡そ自分が苦痛と不快感に耐えている間に終わるだろうと、そう考えていた。

それなのに――。

さっきのあれは一体何だ。自分の中によもやあんなに性感を感じる場所があるなどと、どうやって想像できただろう。それに――。凜桜は眉間に皺を寄せる。ブラッドとまぐわうのが自分にとって不快でもなんでもなかったことがいちばんの問題だった。いや――、敵国の皇子で、しかもあんなに性格の軽そうな者を相手にそんなはずがない。凜桜はそう自分を否定するも、その心はどこか芯を失っている。

「……そんなことがあって堪るか……」

独り言ちると凜桜は再び容器に水を注ぎ、余計な考えを振り切るように勢いよく飲み干した。

浴室に行って体を洗い部屋に戻ってくると、丁度部屋のドアがノックされ、初老の男が一人入ってきた。誰だろうと思って凜桜が身構えていると、白衣を身に纏った男は恭しく一礼する。そしてたどたどしくも天神帝国の言葉で話しかけてくるのだ。

「先程……、皇子からここでイチジョウ様を、診る……診察、するよう言われ……、」

「……ブラッドが？」

「はい」

捕虜の体調管理も一応皇子の仕事というわけだろうか。

「そちらに掛けて。口、開けて下さい」

「……口？」

「私は、歯の医師ですので。虫歯、あるでしょう」

「え……っ」

確かにそうだがそんなことは誰にも言っていない。遠征に加わり暫くした頃に右上の奥歯が痛み出したが薬を使う程でもないと思い、実はずっと放置していた。時たま食事の際に酷く痛むことがあったが、常に物資や人員の不足した前線では儉約のため多少のことは我慢しようと誰にも言わなかった。自分の虫歯なんぞに従軍看護師や備品を充てるくらいなら、出陣で傷を負った者たちの救護にそれらを充てたかったのだ。

凜桜の怪訝そうな顔を見て、驚いたことに

「皇子が言っていました」

と男は言う。

一体あの男、いつ気づいて――。

そう考えたところでふと、先程の行為の初めに舌が見たいと引っ張り出されたのを思い出し、凜桜は赤面した。

あのときか――。

あの男が本当によくわからない。こちらの反応を見て弄び、乱暴にしてきたかと思えばふと優しさともとれる一面を覗かせる。何の他意も無く、本当に自分のことを好いているからこそこのような振る舞いをするのだろうか――。そう考えると何だか先程の行為で感じていたものとはまた違う種類の恥ずかしさが込み上げてきて、凜桜は一人動揺した。

この歯科医師の腕は相当なものようで、無痛のままに短時間で治療は終了した。

「ではまた」

医師は恭しく一礼し、部屋を出ていった。

「探しましたよ！ 皇子！」

自室に入ろうとしているところをワンピースにエプロン姿の侍従に呼び止められ、ブラッドは足を止める。

「今日は一体どうなされたのです？進軍にも応じずあの捕虜の男の部屋にいらつしやったとか……！」

年配の女は分厚い眼鏡の奥から心底心配そうな目線を投げかけてくる。

「体調がお悪いのならお教え下さいまし！幼少よりお世話させて頂いておりますこの私めに、どうぞ遠慮なく何でもお申し付けくださいな。それに……ここ数日皇子のご様子がおかしいと皆申しております。何かあったんでございましょう？」

「……すまなかつた。エリ」

ブラッドは率直に詫びた。

「それから……、こんな時間に申し訳ないが、今すぐ軍幹部と防衛大臣を呼んでくれないか？」

「え……？今からですか？」

外はとっぷりと日が暮れている。ブラッドの唐突な申し出に侍従は困惑した表情を浮かべている。

「ああ。大事な用件を伝えたい」

「僭越ながら……、国王陛下のお許しは頂かれていますので？」

「何とかする。急ぎなんだ。頼んだよ」

皇子は素早くエリに金貨を三枚握らせると自室に入り、素早くそのドアを閉めてしまった。ドアの向こう側でまだ彼女は何か言ってくるが、やがて諦めたのか廊下を足早に引き返していくのが聞こえた。深紅の絨毯と豪華な調度品に囲まれた部屋で、ブラッドは一人窓の外に目をやった。この部屋からは丁度別棟の凜桜の部屋の灯りが見える。

「……愛してるよ。凜桜」

その声は広い部屋の中、誰に届くことも無い。